

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	Altisländischに於ける動詞否定のSuffix-aについて <特集 否定表現について>
Author(s)	谷口, 幸男
Citation	広大言語 , 5 : 1 - 5
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046217
Right	
Relation	



特集 = 否定表現について =

Altisländisch に於ける動詞否定の Suffix -a について

谷 口 幸 男

1.

古代アイスランド第一の詩人といわれるエギルが、最愛の子を荒海に失つて歎く歌 *Sonatorrek* (子を失いて) 中に、次のような否定の Suffix -a が見られる。

En mér fens	されど、麦芽の沼 (麦酒) の
í fðstom þökk	創造者 (海神エギル) は
brosta hófundr	余に激しき敵意もて
á hende stendr;	対抗せり
makakúpp	余は理性の車 (頭) を
í ároar grímo	真直に
rynnes reip	上ぐるを得ず
rette hald,	

また、古エツダ中の教訓詩 *Hávamál* にも数多く、その用法が見出される。

Byrði betri	berrat maðr beranto at,
enn sé manvit mikit;	

旅に持つて出ると、しつかりした理性にまさるものはない。

上記 *Sonatorrek* にはこの他に 7 例見出される。エツダの *Hávamál* 中には 35 例ある。さて、この Suffix -a は私の読んだ限り、古代アイスランドの散文には一度も現れたことがなく、専ら古詩の中にのみ盛に使用されている。以下はこの -a に関して現在までに調べがつかれたことの報告である。

次の雑誌論文は残念乍ら入手できなかつた。関心をよせられる人のため挙げると、H. Kuhn (FBB 60, S. 431-444), Neckel (K Zs 45, 1ff), Sievers (IF. 30, 335ff)。使用した文献は、G. Neckel: *Edda; Altnordische Sagabibliothek*; Clea-

sby: An Icelandic-English Dictionary; Johannesson; Isländisches Etymologisches Wörterbuch; J. de Vries; Altnordisches Etymologisches Wörterbuch; Zoëga; A Concise Dictionary of Old Icelandic; Kock, Bemerkungen zum altnordischen Sprachschatz (Zf dt. Altertum 40. 193ff) その他である。

2.

ゲルマン語の否定詞は ni である。比較のため例を列挙してみると、

Gotisch ik ni im wairps andbindan skaudaraip skohis is Luk.

III 16 (わたしには、彼の靴のひもを解く値打もない)

Althochdeutsch ni waniu ih iu lib habbe' ... Hildebrandslied 29 (いまなお彼が生きてあろうとは思われぬ)

Altsächsisch goस्पell that guoda, that ni habit ênigan gigadon huergin, thiu uuord an thesaro ueero-ldi, Heliand 25 (この世で何処にもこの言葉にならぶもののない福音)

Angelsächsisch Ne hȳrde ic cȳmlīcor cēol gegyrwan hilde-wæpnum ond heaðo-wædum
Beowulf 38

(戦いの武器や甲冑がこれ以上見事に船に積み込まれるのを余は聞き及んだことがない) では Altisländisch にこの ni 又は ne が全く見られないかということ、そうではなく、古詩の中に僅かな例が見られる。

Edda中の Völuspá 5に次のような例がある。

sól pat ne vissi, hvar hon sali tti,
stjornor pat ne visso, hvar þær stadi atto,
máni pat ne vissi, hvar hann megins atti .

(太陽は何処に館を持っているのか知らなかった。星たちは彼らが何処に住いを持っているのか知らなかった。月は彼がどんな力を持っているのか知らなかった。)

ところで上に挙げたゲルマン諸語のうち問題の否定の Suffix-aを持つのは Altisländisch

ndisch のみであつて、全く他には見られない独特の存在である。

3.

ne は古詩中に僅かに見出されるのみで **Suffix-a** がそこでは非常に多く用いられている。そして -a は散文には見出せない上に述べた。では散文や比較的新しい詩で用いられる否定詞は何か。それは、**eigi** である。

Olvir hunúfa var þá nær staddr ok bað konung vera eigi reiða Egil S. 16 (エルヴィル・フヌハはその時傍に立っていて、王に立腹なきいますなど頼んだ)

eigi の他には **eingi** (engi, enginn の形もあり, not one の意) の中性形 **ekki** が **eigi** と同じように良く用いられる。

En þat er ekki undarligt Egil S. 40 (しかし、このことは不思議でも何でもございません。)

周知の如く、古代アイスランドにはエツダのように、その若干のものは9世紀に遡る古詩があり、Skald 詩人の作品があり、123世紀に誕生した多くの散文サカがある。古詩にのみ見られる **ne**, Skaldendichtung の全盛期に用いられた -a, さらにこの両者が全く見られず、**eigi**, **ekki** が専ら使用されているサカ、という具合に9世紀から13世紀以降に至る時の流れを通観するなら、そこに、否定詞の使用は大体、**ne** → -a → **eigi**, **ekki** のように変遷した、と考えられよう。

4.

-a の用法に関して Cleasby の説明を借りると、これは古いもので、詩、法律、古言にのみ用いられる。主に **vera** (sein) 及び不規則動詞と過去現在動詞 (所謂助動詞) 殊に **a** (haben) **mun** (meinen), **skal** (sollen) (この4つで全用例の殆ど半分を占める)、その他強変化規則動詞と若干の第3第4活用の弱変化動詞に用いられるが、第1第2活用のものには殆ど用いられない。

mood (法) では、直接法と命令法のみに見れ、接続法では殆ど見られない。又不定法でも用いられない。

number(数) 及び person(人称) に関しては、単数では 1・2・3 人称ともよく用いられるが複数では 3 人称のみ使われ、1・2 人称は殆ど見られない。

voice (態) に関しては、**reflexive verb** (再帰動詞) と申いられることは殆どない。
pöttiska (思われなかつた)

次に語形に関して

-a と並んで -at がよく用いられる。Skala, skalat, mona, monat. 次に来る語が子音で始まる語なら -a, 母音で始まる語なら -at が好まれる。つまり **Hiatus** を避けるのである。しかし、何時もこの原則を貫いているわけではない。

母音の曲用の後では -at の a が落ちて -t (-d, -p) が残る。eigt (彼らは持たなかつた), だが **Hiatus** をいとわず a の残ることもある。

bitia (切れない)。母音の曲用が長母音なら a は残る。saat (見なかつた)

1 人称単数では通常人称代名詞 (-k=ek ich) が動詞と **suffix** の間に挿入される。

akat (私は持たぬ), emkat (私は……ない)。動詞がもし **gg** で終るときは同化を起す。
hyggkat → hykkat (私は思わない)

念の入っていることには、人称代名詞をさらにつける。makatek (私は出来ない)

2 人称 pu もつけられる。同化により ertatpu → ertattu ここで最もよく用いられる **vera** (sein) の人称変化を Zoëga P. 544 から借りてみる。

	Pres.	pret.
Indic. Sing.	1. emkat	varkat
	2. ertattu	vartattu
	3. erat	varat
Plur	4. erut	varut
Imperat.	verattu (be not thou!)	

このように、makatek (ich kann nicht), Skaltattu (du sollst nicht) のように後に代名詞がついて長くなるのは **Altisländisch** の特徴である。動詞が長母音の時は 2 人称は tt が挿入されて、sattattu (du siehst nicht) となる。

また 1 人称で人称を示す **Suffix g** (←k=ek) が挿入されることがある。

vildigak (ich wollte nicht) mättigak (ich konnte nicht), Skyldigat (wir sollten nicht)

5.

-a の用例を Cleasby によつて歴史的にたどると、これはノルウェーの一部とアイスランドにしか見られぬもので、ノルウェーで確実に用例の見出されるのは 9 世紀の詩人 Bragi Gammli に 2,3 回、10 世紀のノルウェーの古詩 Ynglingatal に 4 回その他にも若干見られる。アイスランドでは 10 世紀を通じて夥しく用いられた。エツダの中では Voluspá では né を好み、-a はあまり見られないが、前にもあげた Havamal では 35 例、又、Skirnismal, Harbardsljá, Lokasenna ではあわせて約 30 例ある。前にあげたエギルのサでは、10 世紀約半と見られる 作中の詩に数多く見出せる。恐らくこの頃が最もよく使用されたらしく、Hallfred (1008 歿) Finar Skálaglam (995 歿) にもよく使用している。ところで 11 世紀に入つてから余り使われなくなつた。Sighvat (995-1040) は使うことは使つているが、他の形 (上述した) をもよく使つている。彼に続く詩人たちは、-a を時折 epic form として使用するのみで、やがて、13 世紀の中頃か末頃には殆どすたれて了つた。

散文では法律の誓いに 13 世紀頃まで用いられたほかは、若干の格言にいくらか残つたにすぎない。そして、上述の eigi, ekki に完全に交代して行くのである。-a の滅びた理由は、丁度中世ドイツ語で ne 又は en が niht にとつて代られたように、接尾辞というアクセントのおかれぬ語形の貧弱さが、否定という重要な機能を果すのに不十分であつからであらう。

6.

-a の語源的説明には諸説がある。Cleasby はゴート語の接尾辞 -uh から説明しているが、これは殆ど受け入れられない。Heusler (Altisländisches Elementarbuch S. 39), Kock, J. de Vries らの説は大體 Urnordisch の *aina (ラテン unum) *aitū, ain を措定している。私の読んだ限りでは Jóhannesson の説が注目に値する。即ち彼によれば、数詞の einn (ein) が接尾辞化して -a になり、否定の Suffix になつた。例えば、veitka (ich weiß nicht) <ne veit ek a <ne veit et at <ne veit ek (n) ainat, neutr. zu germ. *ainaz つまりこの説によれば <一つもない> という ne が落ちた、というわけである。Jóhannesson は eigi も <ne-eigi <ne (negationspartikel) + ei, immer" + gi (verallgemeinernd) のように説明している。

これが正しいとすれば、3 で述べた né → a → eigi, ekki の図式ともよく調和するよう思う